



RÉPUBLIQUE
FRANÇAISE

*Liberté
Égalité
Fraternité*

ATOUT
FRANCE

L'Agence de développement
touristique de la France

パリ・ノートルダム大聖堂

修復工事から一般公開再開へ



フランス観光開発機構

プレス資料

一般公開の再開

- 重要な日程
- 12月7日の式典
- 12月8日以降の訪問について

新しい見学方法

- 受入れ対応スタッフ
- 見学ツール
- 新しい見学ルート

再建の現場

- 修復に携わった職人たち
- これまでの主な進捗
- 今後の整備計画

再開を待ちながら...

- 映画と文学を通じて再びノートルダムを体験する
- 「ノートルダム・ド・パリ：再開に向けて」に登録されたイベントに参加しよう
- ノートルダムの没入型体験

850年の歴史を誇るノートルダム大聖堂、 9世紀にわたる歴史、宗教芸術、建築技術の粋を象徴

年間約1,300万人*の訪問者を惹きつける、ヨーロッパで最も訪問者の多い歴史的建造物であるノートルダム大聖堂。

この大聖堂の建設は、1163年から14世紀中頃までの約2世紀にわたって行われました。当時、西洋で最も大きな大聖堂の一つであり、すでにゴシック建築の傑作とみなされていました。

数世紀後、フランス革命の際に大聖堂は大きな損傷を受けました（財宝の略奪、彫像の頭部を切り落とす行為、尖塔の解体など）。19世紀には、建築家ウジェーヌ・ヴィオレ・ル・デュク **Eugène Viollet-le-Duc** の指揮の下で大規模な修復が行われ、新しい尖塔を含む独創的な要素や装飾が追加されました。

ノートルダム大聖堂は、1804年のナポレオン・ボナパルトの戴冠式、1909年のジャンヌ・ダルクの列福式、1944年のパリ解放の祝典など、多くの重要な出来事の舞台となりました。フランスの歴史に消えることのない存在として刻まれており、1991年からユネスコの世界遺産に登録されています。

2019年4月15日、850周年を祝うための修復作業の最中に起きた大火災を、世界中が無力感の中で目撃しました。この火災により、尖塔、身廊と袖廊の屋根、さらに屋根組が損傷しました。

ノートルダム大聖堂は、2024年12月8日に再びその扉を開きます。全世界から年間約1,500万人の信徒や旅行客が訪れる予定で、多くの人々がノートルダム大聖堂に再び入場できる日を待ち望んでいます。

大聖堂は、一日**最大4万人**を迎える計画で、**同時に最大2,500人が入場できる**よう調整されています。この一日あたりの訪問者数は、ノートルダム大聖堂の10倍の広さがあるヴェルサイユ宮殿の訪問者数の約2倍に相当します。さらに、ヴェルサイユ宮殿の2倍の面積を持つルーヴル美術館の訪問者数と比較しても、その3分の1ほど多い数となります。

長らく待たれたノートルダム大聖堂の一般公開再開は、すでに充実した2024年を最良の形で締めくくるものとなるでしょう。

*出典: [Notre-Dame de Paris en chiffres - PARISCityVISION](#)

■ 一般公開の再開

- 重要日程
- 12月7日の式典
- 12月8日以降の入場に関する条件



重要日程

12月7日

祈祷の夕べ、大統領立会のもと、
大聖堂の扉が再び開かれる

12月9日

無原罪の聖マリアの祝日

6月9日

文化的見学の団体による
訪問開始

2024 2025

12月8日

午前10時30分より大統領の立会
いのもと、初ミサと祭壇の奉献式
を実施。その後、**一般向けの訪問
を開始**。（一般公開される初ミサ
は午後6時30分より開催）

2月1日

巡礼者グループ向けの訪問開始

12月7日～15日

「オクターヴ」（8日間にわたる再公開記念式典）、
その後バッハのコンサートを12月17日と18日に開催。

12月7日の式典

この夜の式典は、多くの人々にとって親しみやすく、政治性と精神性を兼ね備えたものとなります。祈りの時間、証言、音楽、ダンス、大作家の文章の朗読が予定されています。

午後9時から、フランス・テレビジョンFrance Télévisionsが大聖堂の関係者と協力し、制作会社エレクトロン・リーブルElectron Libreによって手掛けられる国際放送の芸術番組が、大聖堂前の広場で始まり、その後、内部で続行されます。この放送では、大聖堂の再公開の喜びをできるだけ多くの人々と共有するとともに、再公開を可能にしたすべての人々に感謝を伝えます。

この番組は、中世の「壮大な神秘劇」を現代風に再解釈した形式で上演されます。舞台芸術のあらゆる要素を取り入れ、フランス国内外の著名なアーティストが結集して、ノートルダム再建に尽力したすべての人々—消防士、建築職人、アーティスト、支援者—に敬意を表します。最後に、この放送は、大聖堂のファサードを舞台にした壮大な音と光のショーで締めくくられます。

ノートルダム大聖堂の再公開に関する重要な日程についての詳細は、以下、パリ大司教区によるプレス資料をご参照ください：

【英語】 [2024 11 13 – Press Kit – Notre Dame Reopening](#)

入場条件

大聖堂への入場条件は、12月初旬に[ノートルダム大聖堂公式サイト](#)に詳細が公開されます。

無料で特定の時間枠に入場できる予約は12月7日から利用可能となり、12月9日以降の入場についての予約できます。【※再開直後の一週間（12月8日～15日）に行われるミサで一般の方が参加できるものについては、12月3日の午前中（フランス時間）から予約開始】

個人訪問者は、入場希望日の2日前、前日、または当日に時間枠を予約できるため、柔軟に訪問が可能です。ただし、翌週や翌月の予約はできません。

予約は、ノートルダムのSNS、公式ウェブサイト、およびモバイルアプリを通じて行えるようになります。

個人およびグループの訪問時間

12月8日夜から：個人訪問者、一般の来場者、信者向けの訪問を開始（オクターヴ期間中の特定の時間枠にて）：

- 12月8日（日）：17:30～20:30
- 12月9日（月）～12月13日（金）：15:30～22:00
- 12月14日（土）および12月15日（日）：15:30～20:00

12月16日以降は、通常のオープン時間（7:45～19:00）となり、通常の宗教行事が行われます。

2025年2月1日以降：10名までの信仰グループ向け訪問を開始。登録は以下のメールアドレスで受付：pelelerinage@notre-damedeparis.fr

2025年6月9日以降：25名までの文化団体向け訪問を開始。

- 2025年3月より、入場管理プラットフォームで登録を開始
- 定期礼拝、土曜午後、日曜は訪問不可
- オーディオフォンの利用が必須
- 大聖堂により認定されたプロのガイド（資格保持者）の随行が必須

補足情報

- 大聖堂への入場は無料ですが、内部の「宝物館 **le Trésor**」は特別な博物館の扱いのため有料となります。
- 礼拝に参加を希望する信者は、座席に空きがある限り予約なしで入場可能です。
- 大聖堂への入場に予約は必須ではありませんが、待ち時間を減らすために予約が強く推奨されます。
- 入場時には、以下のような区別された待機列が設けられます。
 - 個人向けのオンライン上での待機列
 - 団体向けの待機列
 - その他、予約の有無や訪問目的（信者または観光客など）に応じた待機列

■ 新しい見学方法

- 受入れ対応スタッフ
- 見学ツール
- 新たな見学コース



受入れ対応スタッフ

現在約20名で構成される受入れ担当スタッフが、12月には約60名に拡大され、訪問者や信者の対応に専念します。

また、訪問者のアクセスや、彼らの快適と、静かな鑑賞、瞑想、祈りをサポートするために、「ノートルダム受入れRecevoir Notre-Dame」協会と連携して、500名のボランティアチームが動員されます。このボランティアは再公開後から2025年を通じて活動します。

- **ボランティアのミッション**：訪問者を迎え案内し、大聖堂の歴史や修復、使命についての情報を提供すること。
- **採用条件**：定期的に活動できること（理想的には2025年を通して毎月3～4時間）。
- **詳細について** 以下のアドレスへご連絡ください：accueil@notredamedeparis.fr

見学ツール

見学のお供となるアプリケーション「compagnon de visite」が、12月初頭に大聖堂の公式ウェブサイトおよびAndroid、iOSの各アプリストアでダウンロード可能となります。このアプリは、訪問者が大聖堂を新たに発見するための補助ツールとして設計されており、特にアクセシビリティに配慮されています。このアプリは、まずフランス語、英語、スペイン語で提供され、2025年中に他の言語も追加される予定です。アプリは以下の5つの訪問ルートを提供します：



一般向け、家族や子供向け、巡礼者向け、音声ガイド（視覚障がい者向け）、平易に理解できる形式

大聖堂の見学と同様に、このアプリも無料で利用できます。

その他の見学用の資料など：

- 視覚に障がいのある方のために、触覚で感じられる板や3D模型が利用可能となります。
- 教育者向けに作成された新しい教育資料（3言語対応）が、近日中にオンラインで公開される予定です。
- 多言語対応の出版物、ガイド、カタログも現在準備中です。

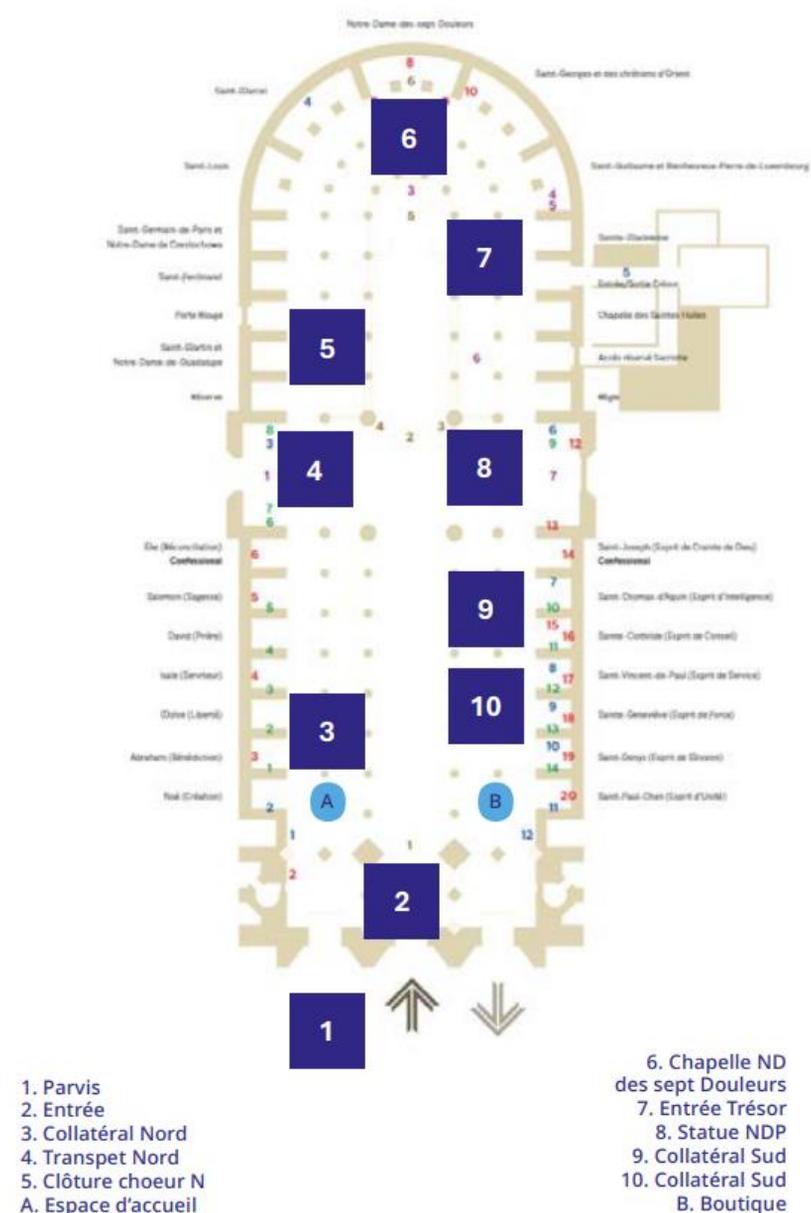
新しい見学ルート

新しい見学ルートでは、これまでのルートとは異なり、北側から南側、つまり左から右への流れが提案されています。これは、**2019年の火災以前に存在していたルートとは対照的**です。このルートは、大聖堂の特徴的な不変の要素、特に内陣障壁を基盤としています。この壁には、北側にキリストの生涯、南側にキリストの復活に関連する場面が彫刻されています。

デジタルアプリケーションやガイドを利用することで、このルートの意味をより深く理解することができます。

入場は最後の審判の門（中央の門）から行われます。

Parcours dans la Cathédrale *Les principaux points d'intérêt*



新しい見学順路

■ 再建の現場

- 修復に携わった職人たち
- これまでの主な進捗
- 今後の整備計画



修復に携わった職人たち

「アトリエ・ド・ノートルダム」のアーティストたち

「アトリエ・ド・ノートルダム L'Atelier de Notre-Dame」は、パリ大司教区が監督するプロジェクトであり、大聖堂の内部修復に携わったアーティストや専門家たちを集めた取り組みです。

「沈黙」が、この新しい創作におけるデザイナーやアーティストたちを導くテーマとして設定されています。このテーマは、850年の歴史を持つ石造りとステンドグラスで構成された大聖堂の雰囲気損なうことなく、繊細にその空間に溶け込むことを目指しています。

典礼用の調度品、水盤、その他の祭具:

祭壇：フランス人デザイナーで彫刻家のギヨーム・バルデ Guillaume Bardet によってデザインされた、力強く永遠の美を持つブロンズ製の典礼用調度品です。この祭壇は、聖なる空間に調和し、大聖堂の黄金色の石やステンドグラスの光と対話するように設計されています。**その他の祭具**：ギヨーム・バルデは、祭壇だけでなく、洗礼盤、講壇（アンボン）、司教座（カテドラ）、聖櫃（タベルナクル）を含む宗教儀式の用具全般のデザインも担当し、全体の調和を図っています。



祭壇

© Guillaume Bardet



祭具

© Guillaume Bardet

修復に携わった職人たち

「アトリエ・ド・ノートルダム」のアーティストたち (続き)



祭服

光の輝きから着想を得た装飾

700着の祭服（コープ、ミトラ、ストラ、カズラ、ダルマティカ）が、フランスの工房と、スタイリストのジャン＝シャルル・ドゥ・カステルバジャック **Jean-Charles de Castelbajac** の協力のもとでデザインおよび製作されました。

祭服のデザイン

© Jean-Jacques de Castelbajac

座席

椅子、ベンチ、祈祷台

1,500脚の椅子は、フランス産（ソローニュ地方）のオーク材を100%使用して製作中です。この椅子は、ランド地方にある家族経営の企業が製作を担当し、フランス人デザイナーのイオナ・ヴォートラン **Ionna Vautrin** との協力でデザインされています。



椅子 © Ionna Vautrin

奉納用ろうそく

100%生分解性の奉納用ろうそくが、世界で最も重要な巡礼地の一つであるフランス・ピレネー山脈にあるルルドのろうそく工房「シエルジュリー・ド・ルルド (Ciergerie de Lourdes)」で製造されています。



© Ciergerie Lourdes-Pierre Vincent

その他の調度品：

聖遺物箱（茨の冠のための特別な容器）：シルヴァン・デュブイソン **Sylvain Dubuisson** によるデザイン

補足的な調度品（距離を保つための仕切り柱、献燭用のろうそく立てとその展示用家具）：ヴァンサン・デュポン＝ルージュエ **Vincent Dupont-Rougier** によるデザイン

詳細は下記プレス資料（仏語）で確認できます：[dossier de presse -
_l_atelier_de_notre-dame.pdf](https://www.dioceseparis.fr/_l_atelier_de_notre-dame.pdf) ([dioceseparis.fr](https://www.dioceseparis.fr))

修復に携わった職人たち

伝統を守り続ける企業

コルニーユ＝アヴァール鑄造所

ノルマンディーにあるコルニーユ＝アヴァール鑄造所 **Cornille-Havard** は、「フランス最後の鐘製造者」として知られ、ノートルダム大聖堂と深い関わりを持っています。この鑄造所は**2013年**に大聖堂の**850周年**を記念して**8つ**の新しい鐘を製造し、さらに最近では**9つ目**の鐘「勝利の鐘」を製作しました。この鐘は**2024年**パリオリンピック・パラリンピックの金メダリストたちによって、今夏スタッド・ド・フランス **Stade de France** で鳴らされた後、パリのノートルダム大聖堂に届けられました。

2019年の火災後、コルニーユ＝アヴァール鑄造所は、大聖堂の鐘を清掃し、熱による損傷を受けた**2つ**の鐘を修復する任務を委ねられました。**2023年**7月に鐘が取り外された際には、北塔と鐘の重量や振動を支えるために設計された屋根構造の一部も修復されました。この構造は、鐘の振動が建物の石組みに影響を及ぼさないようにする役割を果たしています。



2024年パリオリンピックのために製作された「勝利の鐘」**La cloche de la victoire** は、オルガンの近くにある内部のギャラリーに新しく鑄造された**2つ**の鐘と共に設置されます。この鐘は、最も荘厳なミサの際に鳴らされ、クリスマスミサで初めてその音色が響く予定です。この鐘は、オリンピックの勝利の象徴として、今後何十年にもわたりその音色を響かせ続けるでしょう。

© Mario Fourmy/SIPA

ノートルダム大聖堂の再公開時には、鐘楼全体が**11個の鐘**で構成される予定です。南塔には、大鐘エマニュエル **Emmanuel** に加えて、新たに小鐘マリー **Marie** が加わりました。また、北塔には、コルニーユ＝アヴァール鑄造所によって製作された**9つ**の鐘が設置されています。

大鐘エマニュエル **Emmanuel** は、フランス革命時に砲弾に鑄造されなかったノートルダム大聖堂唯一の鐘であり、大聖堂で最も古い鐘です。この鐘は**17世紀**に遡ります。

ゴブランおよびボーヴェの国立工房、オービュッソンの民間工房

大聖堂の礼拝堂を飾るために、**7点**の新しいタピスリーの製作が、ゴブラン **Gobelins** とボーヴェ **Beauvais** の国立工房、そしてオービュッソン **Aubusson** の民間工房へ発注されました。

これらの作品の制作は、現代アーティストであるミケル・バルセロ **Miquel Barceló** とマイケル・アーミテージ **Michael Armitage** に委ねられており、宗教芸術と、ゴブランとボーヴェの国立工房、さらにオービュッソンの民間工房が持つ卓越した技術を融合させることを目的としています。

これらの織作業は**2025年**に開始される予定ですが、それまでの間、ノートルダム大聖堂は再公開に伴い、**20世紀**の偉大な画家たちによるタペストリーを展示します。

修復に携わった職人たち

伝統を守り続ける企業 [続き]

屋根構造と尖塔

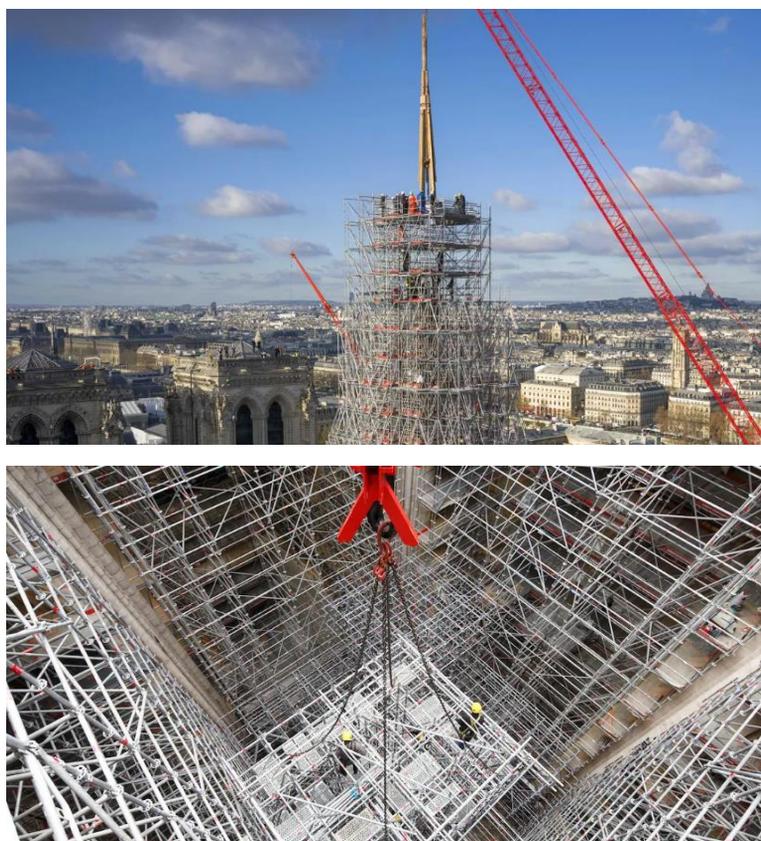
身廊、内陣、袖廊のオーク材による屋根構造と鉛の屋根は、完全に元の形で復元されました。これらは大聖堂全体の再生を外部から示すものであり、大聖堂修復の最も象徴的な行程とされています。

この工程は、次の2つの部分に分かれて進められました：

- 建築家ウジェーヌ・ヴィオレ・ル・デュク **Eugène Viollet-le-Duc** により1859年から1864年にかけて建てられた尖塔および袖廊の大屋根の再建。
- 13世紀初頭に建てられた身廊および内陣の大屋根の再建。

1859年にヴィオレ・ル・デュクによって建てられた尖塔を元の形で復元するため、高さ100メートルに及ぶ足場が設置されました。その後、尖塔は鉛で覆われ、装飾が施され、さらに頂上には十字架と雄鶏が据えられました。

大聖堂の屋根構造は、パリ最古の屋根構造のひとつであり、樹齢300年から400年の木材で作られていました。大工、林業従事者、建築家、研究者の協力によって、この屋根構造は伝統的な技術と現代的な手法を融合させ、設計、加工、組み立てが行われました。これにより、建築様式や構造上の制約に忠実に復元が実現しました。



尖塔の先端を設置

修復に携わった職人たち

伝統を守り続ける企業 [続き]

オベール＝ラバンサ工房

フランス北西部のノルマンディー地方に位置するクータンヌ Coutances に拠点を置くオベール＝ラバンサ Aubert-Labansat 社の工房では、ノートルダム大聖堂のために高さ12メートルの特別な階段が製作されました。この特異な構造物は、地元の卓越した技術の結晶を象徴しています。階段は非対称な円錐形に設計されており、どの段も同じ形状ではないという特徴を持ちます。この技術的な挑戦を、オベール＝ラバンサの木工職人や建具職人が見事に成し遂げました。同工房は、歴史的建造物や古い遺産の修復において卓越した伝統を受け継いでいます。



これらの職人たちはその専門技術を活かし、ヴェルサイユ宮殿、アンヴァリッド、さらにはモン・サン・ミシェル修道院といった名高い建造物の保存にも貢献してきました。

オベール＝ラバンサ工房の職人
@GillesP PATRY / La Presse de la Manche

石工たち

2年間にわたり、石工たちは大聖堂の再建に先立つ重要な工程として、アーチ構造の補強、鉛で詰まったガーゴイルの清掃、その他の補強・安全確保の作業に取り組みました。

伝統的な技術と「空中作業」を求められた石工たちは、例えばロープ作業を学びながら、ノートルダム大聖堂のアーチを修復しました。ときには危険を伴うこの作業を、情熱を持った職人たちが見事に成し遂げました。

修復作業の様々な工事については次の資料をご参照ください: [Rebâtir Notre-Dame de Paris - Le programme des travaux de restauration](#)

現代ステンドグラス

「21世紀の象徴」を反映する新しいステンドグラスが、大聖堂のために制作されます。このためのコンペが開かれ、現代アーティストたちが身廊の南側面礼拝堂6か所を飾る具象的なデザインの提案を募っています。

これまで使用されていたヴィオレ・ル・デュク Eugène Viollet-le-Duc 制作のステンドグラスは、ノートルダム大聖堂に関する作品を収めるために、セーヌ川沿いの歴史ある病院施設、いわゆるオテル＝デュー の敷地内に設置される美術館に移される予定です。

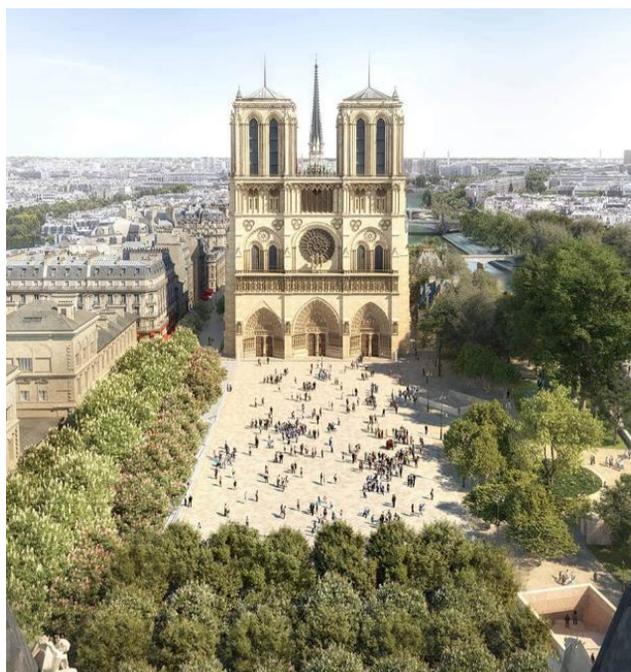
これまでの主な進捗

2020年5月31日	正面広場の再公開
2023年7月	修復された8つの鐘が設置される
2023年12月16日	雄鶏が再び大聖堂の頂上に据えられる
2024年1月	内陣の中世の屋根組みの修復が完了
2024年2月	尖塔が再びそびえ立つ
2024年3月	身廊の屋根組みの修復が完了

今後の整備計画

少なくとも3年間は、パリ市が主導する形でベルギーの景観設計家バス・スメッツ **Bas Smets** が監修するノートルダム大聖堂周辺の整備工事が続けられます。スメッツ氏は正面広場の再整備を担当します。

新しい正面広場は、森の空き地をイメージした設計となり、大聖堂内部の床と同じような寸法の石灰岩の敷石で覆われます。さらに、入場を待つ人が日陰で快適に過ごせるよう、広場の両側に150本の木が植えられる予定です。また、暑い時期には、広場に厚さ5ミリメートルの水膜を流し、蒸発によって空気を涼しく保つ仕組みが導入されます。



大聖堂の新しい正面広場

© Ville de Paris / bureau Bas Smets / GRAU

地下駐車場（火災以来閉鎖中）だった現正面広場の地下部分は、広さ3000㎡の人が集う空間へと改装されます。この空間は、パリのパサージュ（アーケード街）を思わせる設計で、本屋、カフェ、トイレが併設され、セーヌ川の河岸への直接アクセスが可能になるほか、考古学的遺跡の地下室ともつながります。

これらの追加スペースは、年間1200万から1500万人にのぼる大聖堂訪問者を快適に迎えるために貴重な施設となるでしょう。

さらに、ノートルダム大聖堂の後陣と控え壁の修復工事は、公的機関が主導し、今後4～5年にわたって継続する予定です。

■ 再開を待ちながら...

- 映画と文学を通じて再びノートルダムを体験する
- 「ノートルダム・ド・パリ：再開に向けて」に登録されたイベントに
- ノートルダムの没入型体験



映画と文学を通じて再びノートルダムを体験する

ノートルダム大聖堂の歴史に触れ、その美しい建築をより深く味わうために、大聖堂に脚光を当てた作品のいくつかを紹介します。

ヴィクトル・ユゴー の小説『ノートルダム・ド・パリ』

フランス文学の傑作の一つであるこの歴史小説は1831年に発表され、15世紀のパリを舞台としています。物語は壮大なノートルダム大聖堂とその住人たちを中心に展開し、醜い鐘つき男カジモド Quasimodo と美しいジプシーの踊り子エスメラルダ Esmeralda を描いています。この小説はゴシック建築への賛歌であるとともに、歴史的建造物の保存を訴える作品でもあります。その影響は非常に大きく、フランス政府が大聖堂の修復プロジェクトを1844年に開始し、ノートルダムを再び輝かせるきっかけとなりました。



ディズニースタジオのアニメーション映画『ノートルダムの鐘』

1996年に公開されたこのアニメーション映画では、ヴィクトル・ユゴー Victor Hugo の小説『ノートルダム・ド・パリ』を再解釈し、物語の中心にノートルダム大聖堂が据えられています。

映画『アメリ』

ジャン＝ピエール・ジュネ監督のこの映画では、主人公アメリ が幼い頃、ノートルダム大聖堂の敷地内で登場するシーンがあります。



映画『ミッドナイト・イン・パリ』

ウディ・アレン 監督はこの映画でパリを舞台に選び、ノートルダム大聖堂を撮影せずにはいられませんでした。映画のいくつかのシーンで、カーラ・ブルーニ やオーウェン・ウィルソン とともにその姿が映し出されています。

「ノートルダム・ド・パリ：再開に向けて」に登録されたイベントに参加しよう

この認証マークは、大聖堂の次回の再公開に向けて、今後数か月間にわたって開催される文化的催し、展覧会、講演会、イベントを集約したものです。パリをはじめ地方、さらには世界各地で、約15件のイベントが予定されています。

詳しい情報はこちらをご覧ください: [Rebâtir Notre-Dame de Paris - Label "Vers la réouverture" - Tous les évènements autour de Notre-Dame \(rebatirnotredamedeparis.fr\)](https://rebatirnotredamedeparis.fr)



2024-2025年のノートルダム大聖堂では、グレゴリオ聖歌から現代音楽の創作まで、幅広い内容の特別なプログラムが予定されています：全50回のコンサート（毎週火曜日の夜に開催）、20人の国際的なソリストを招聘、15のオーケストラおよび合唱団を招聘、大オルガンによる12回のリサイタル、6つ以上の世界初演作品。

詳しくはこちらをご覧ください： Toutes les informations ici : [Musique Sacrée à Notre Dame de Paris](#)



ノートルダム没入型体験

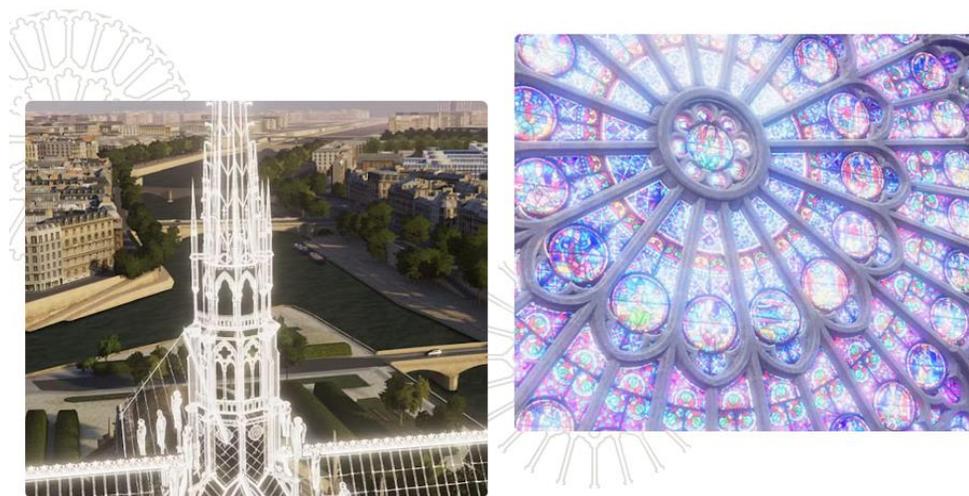
「永遠なるノートルダム」"Eternelle Notre-Dame":

オランジュ社 Orange とアマクリオ・プロダクションズ Amaclio Productions による、新たな没入型のバーチャルリアリティ体験「永遠なるノートルダム "Eternelle Notre-Dame"」が誕生しました。この体験では、専用の装置を装着した訪問者が、完全にデジタルで再現されたノートルダム大聖堂をイマーシブな環境で探索することができます。

800㎡以上の広大なスペースで、中世から現代までの時代を旅し、大聖堂の秘密を紐解きながら、その歴史を形作った出来事や人物を発見・再発見できます。

場所：ノートルダム正面広場の地下、ラ・デファンスの新凱旋門

詳細情報はここから：[L'expédition immersive en réalité virtuelle \(eternellenotredame.com\)](https://eternellenotredame.com) / 2025年2月まで



Images issues de l'expérience immersive "Eternelle Notre-Dame"

Ubisoft によるVR体験

世界中の複数のフェスティバルで選出されたUbisoftによるノートルダム大聖堂のバーチャルリアリティ体験が、現在すべてのPC VRヘッドセット所有者に無料で提供されています。この体験では18世紀後半のパリに没入し、さまざまな視点から大聖堂を発見することができます。体験時間は短く、インタラクション機能はありませんが、歴史や建築を愛する人々にとっては魅力的な内容となっています。



VRの世界に足を踏み入れたことのない方でも、ノートルダム大聖堂を体験したいと思う方へ

ノートルダム大聖堂を発見するために没入型の体験を提供する動画が制作されました。タイトル：『ノートルダム・ド・パリ：過去への旅』 Notre-Dame de Paris : Voyage dans le Passé 視聴はこちらから：[Notre-Dame de Paris : Voyage dans le Passé \(youtube.com\)](https://www.youtube.com/watch?v=...)

#ActiveurDeTourismes

ATOUT
FR**A**NCE
www.atout-france.fr

